

八屋ん浜の守り石

むかしむかし、もう何百年も昔のことじゃが、この八屋の明神ヶ浜みょうじんがはまいつたいは、それほど大きいわけではないが、いい浜なまでなあ。キス、クロダイ、なんぞ魚さかながよう取れたというんじゃ。そん浜に、太兵衛たへいゑというわかいりょうしが住んでおった。太兵衛はおとうについてりょうをおぼえ、そろそろ一人立ちひとりだちすることになった。

一人前いちにんまえになった太兵衛は、毎日朝まいにちあさはよ早く起きて舟ふねを出した。あみ打ちあみうちもうまくいくようになり、りょうもまずまずじゃった。一ヶ月いっかげつほどたったあるばん、太兵衛は、おつかさんにたのんだ。

「おつかあ、あしたはにぎりめし一つ作つくってくれ。おら、りょうになれちきたきに、ちと沖おきの方ほうまで行いってみてえ。」

「まあまあ、何なんとたのましいことじゃ。けんど、あんまりむりはせんことな。」

次つぎ日ひ、太兵衛はにぎりめし一つ持もって、りょうに出でかけた。朝あさの間まは、魚うみがおもしろいほどとれた。太兵衛は、海うみの上うへで早はや昼ひるにした。

「おつかあのにぎりめしは、たいそううめえなあ。」

太兵衛は元げん気きもりもりじゃった。にぎりめしの中なかに入はいっておったう



明神ヶ浜

めぼしのたねを、いきおいよくプツととばした。うめぼしのたねは、ぽちゃんと海の中。そして、また、りょうをつづけたんじやが、ふしぎなことに今度はぎこばっかりでさっぱり取れんことになった。

「しおの流れがかわったんじやろうか。」
「しおの流ながれがかわったんじやろうか。」
と思おもうてるをこくと、カツツと、ぶつかるものがあつた。

「何じやるか」

と太兵衛はるを止とめて、あみをそつとたぐつてみると、何とこばしほどの石いしがひっかかっておつた。

「こんなところに石があるんじやろうか。」

と、ふしぎに思おもうたがそれほど気きにもとめんで、石をぽちゃんと海に投なげ返かえした。しかし、その日はそれっきり、りょうもさつぱりいえで、家いえに帰かえつてしもうたんじや。

あくる日、太兵衛はにぎりめしを二ふたつ持もつて海に出いかけ、きのうよりすこしおきの方かたへ舟ふねを進すすめてみることにした。きのうと同じおなじように朝の間はまずまずのりようじやつた。気をよくした太兵衛は同じおなじように早はや昼ひるのにぎりめしを二ふたあつ食たべ、うめぼしのた



ねを、ぼちゃん、ぼちゃんと海の中にとばした。そして、太兵衛

が舟を進めようとすると、またカツツと、ろに当たるものがあつた。あみをたぐってみると、昨日より大きい石がひっかかつておるではないか。

「ややつ、一度ならず二度まで……。」

太兵衛は、気味が悪くなつてきたが、石をどぼんと海に返すとしようをつづけた。ところが、その後さつぱりで、ざこすらあみに入らんじやつたそうな。

またそんなあくる日、太兵衛は、またまたすこうしおきの方へ舟を進めてみることにした。

今度はにぎりめしを三つ持つて海に出かけた。朝の間はぼちぼちのりようじやつたが、早昼のにぎりめしを三つ食べ、うめぼしのたねを、ぼちゃん・ぼちゃん・ぼちゃんと海の中にとばし、舟を進めようとすると、また、ガツツと、ろに当たるものがあつた。あみをたぐってみると、きのうよりいちだんと大きい石がひっかかつておる。そして、うす赤く光つておるようにも見える。

「なんちゆうことか、またしても大きな石が……。」

太兵衛は、もうりようをするのを止めて家に帰つてしまった。

その次ん日も、また次ん日も、太兵衛がりように出ると、うす赤く光る石があみにかかり、魚がさつぱり取れんごとなつてしもつた。

「おつとう、おつかあ、なしじやろうか。魚がちいつとも取れん。」

「なしじやろうかのう。どんあたりに行つたんか、お前、もつとくわしゅう話してみい。」

「舟を出したところからじゅんに思い出してみい。」

太兵衛は、ゆっくりりりようの様子をおつとうとおつかあに話した。

「みょうなこつちやのう。」

話を聞いたおつとも考えこんでしもつたが、はたとひざをたたき

「そうじゃ、今度そんな石を持って帰ってこい。何かのいわれがあるかもしれん。」

と言った。おつとくに言われるまま、海に出かけた太兵衛は、うす赤く光る石を持って帰った。その石を見たおつかあが言った。

「太兵衛、お前、うめぼしのたねはどげしよつたんかや。にぎりめしの中にいつも入れちよつたじやろつ？お前が持って帰つたにぎりめしの竹の皮にはたねが見当たらんきの。おかしいなあち思つちよつた。」

「なんち？うめぼしのたね？…、そんなもん海にぷつとふき出して…。」

「それじゃが、太兵衛。」

「そうじゃ…、おそれじゃが。前に言わんじやつたかのう。昔から、海で仕事をしするもんはの、海をよごさんごとしてきたんじや。たとい、うめぼしのたね一つでん、海にはすてんのがりようしのおきてじや。」

「なあんも知らんじやつたとはいえ、大へんなこつちや。」

おつとつとおつかあは、がてんがいったとばかり口々に言った。

「どげしようかのう。おらは、もうりようには出れんのじやろつか。」

すっかりしよげてしもうた太兵衛に、おつとつとおつかあはしあんして言った。

「どつじやろつ。こん石を大切にたいせつまつつちやあ…。」

「そうじゃ！それがよかるつ。」

そこで、その石をこの間にまつて朝ばんゆるしをこつたそうな。

七日なのすぎたころのことじゃった。まつている石の赤みがなくなつてうす青あおく見えるようになったそうじゃ。太兵衛は、おそろおそろりように出てみた。すると、今いままでいじょうに大きな魚がとれるようになったそうじゃ。それからというもの、太兵衛は、りょうに出るときは朝ばんかならずおまいりしていくようになったということじゃ。ん？もちろんうめぼしのたねはちゃあんと持って帰るようにしたそうじゃ。

その話は、八屋ん浜のりょうしたちにも広ひろまり、太兵衛の家の石におまいりしてりょうに出る者ものも多おほかつたそうじゃ。その後あと、いつのころからお宮みやさんにまつられることなつたということじゃ。

今でもその石は八屋ぎよきょうのすぐそばの巖いづくしまじんじや島神社にまつられていて、りょうの安全あんぜんと大りょうきがんの守り石になつていふということじゃ。

海をよごさんということは大切じゃなあ。

(土屋富子)

